

【熊本県賞】

「あたりまえの水？」

熊本県 真和中学校 二年 頼藤 維生

最近、能登半島に関するニュースを見た。地震発生から1年3か月が経ち、ついに石川県内の避難者がゼロになったという報道があった。ただし、別のニュースでは、被害の爪痕が今も色濃く残っている現状が伝えられていた。壊れた建物がそのまま放置されていたり、水道がいまだに復旧していない地域があったりする。また、被災地では人口が減少しているという深刻な問題も報じられていた。このようなニュースを目にし、水の問題について改めて気になったため、少し調べてみることにした。ちょうど、父が地震の発生直後に能登でボランティア活動をしたことを思い出し、そのときの話を聞くことができた。

能登半島地震は2024年1月1日に発生した。父はすぐに避難所の手伝いのため、金沢経由で能登に向かったが、道中の道路は崩れたり寸断されていたりして、現地に辿り着くまでも苦労があったという。特に途中でトイレに行こうとしても、水がないためにトイレの衛生状態が保たれておらず、本当に大変だったということだった。

避難所では、飲み水や顔を洗う水もすべてペットボトルに頼るしかなかった。食事には水が使えず、調理もままならず、避難所の食事はレトルトや配給の弁当などが中心だったようだ。また、トイレの後に手を洗う水もなかったため、手指の消毒はアルコールに頼っていたそうだ。特に印象的だったのは、「トイレを流す水がない」ということ。そのためトイレを清潔に保つのが難しく、避難所の衛生環境は非常に悪化していたようだ。トイレは、便器の上にビニールをかぶせ、その上に凝固剤を入れた袋を敷いて用を足していたという。消毒の手段が限られていたこと、トイレの衛生状態の悪さなどが重なり、新型コロナウイルスやインフルエンザ、感染性胃腸炎などの感染症が広がっていたという。さらに、水分や栄養の不足により、便秘など体調不良を訴える人も少なくなかったようだ。父はそのような過酷な状況を経験したあと、自宅に戻って「ト

イレの水が流れることのありがたさ」を強く実感したと話していた。

この話を聞いた後、ニュースを改めて見返してみると、水道の復旧がまだ進んでいない地域があるという事実にも、より深く心をうごかされた。僕は朝起きて、どれだけ水と接しただろう。ふと考えてみた。顔を洗うのも、歯磨きするのにも水を使った。朝ごはんを食べた味噌汁も水を使って作られているし、トイレも水使を使って流した。さつき着替えた洋服も水で洗ってもらったものだ。この後、夜になって入るお風呂も水を使う。あまり考えることなく水を使っているけれど、改めて考えると水は僕たちの生活にとっても身近にあり、必需品だが、当たり前のもでもないかもしれない。

能登の地震のことを調べてみて、水を使えることに感謝すると同時に、日頃の蓄え、そしていざ水を使えないときの備えをしておかないといけないと思った。水の大事さを再認識した春休みだった。